

妙法蓮華經如来寿量品偈中の

「諸有修功德」の訓みに就いて

間 宮 秀 学

所謂「自我偈」中の、

「諸有修功德」は従来、そして今日なお、

「もろもろのあらゆる功德を修し、……」と、訓み慣らされている。

小林是恭先生は

「諸有^{ちちぞ}功德を修^なし」とよまれ、

布施浩岳博士は、問宮の質問に応えられて、

「諸有修功德の訓みについては、故小林是恭師も聞いてきました。「諸有」はよく見える（法華經中にも）訳語で衆生の意味です。先師はどうして、ここだけ変に訓まれたのでしょうか。同類の誤りはかなりあります。訂正版を楽しみにして下さい。」（昭和四十年一月二日）

と親書を下さった。

しかし、昭和四十一年一月発行の、布施博士改訂、妙法蓮華經頂妙寺版では

「諸有修三功德二柔和質直者」となっている。

小林先生の「あらゆる」と布施博士の「モロモノ」とは、「すべての」と「多くの」との意味の相違こそあれ、共に多数をあらわす修飾語である。しかるに、布施博士の「衆生」と「モロモノ」とのつかいわけは、同一人のものとしては、ふにおちない。前者は多人数を表わすところの名詞であり、後者は多数を表わす形容詞である。文法上の品詞の相違がある。

ここで「諸有」の語は果して複数を表わす形容詞。(或は副詞)であるのかどうかを調べて見る必要がある。簡野道明著「縮冊字源」にも、諸橋徹次著の「大漢和辞典」にも「諸有」の熟字は見当らない。諸有は「諸」と「有」との二つの言葉即ち二種類の品詞ではないか。これを調べる前に仏教の熟語として考えて見る。布施博士は前掲の如く「衆生」の意味であると言われたこともある。

織田得能師の「仏教大辞典」には

「衆生の果報は因あり、果あれば之を有と云ふ。三有、四有、七有、九有、二十五有等の別あれば総じて諸有と云ふ。」

次に望月信亨師の「大辞典」を見るに、「諸有」の項なし。「有」の説明では

「梵語bhava存在の義。」(その他むずかしき説明あるも、ずばり有情そのものを指さず)この点、布施博士説と違ふ。

木村日紀先生におききした時、「諸有修功德」の有は梵本では *sattva* 有情となっているとの御答であつた。しかし後になって考えて見るに *sattva* は「諸有修功德」の中の「有」に相当するものではなく、「諸有修功德柔

和質直者」の中の「者」に訳されたのではないか。そのために、布施博士は「諸有」に「モロモロノ」の訓みを与えられたのではないか。

しかし、「モロモロノ功德を修し、柔和質直なる者は」と訓むと、「モロモロノ」は功德を修飾する形容詞となり「則皆見我身在_レ此而説_レ法」ためには「モロモロノ功德を修することが必須条件となる。第一に次の如く形容詞と名詞との間に動詞が入っていることになる。

形容詞 動詞 名詞
「諸有 修 功德」

原則として形容詞は名詞を修飾する品詞であるから、若し「モロモロノ功德を修する」義ならば梵語から漢訳される時に、

「修諸有功德」と諸有を功德の形容詞として置くべきではないか。見仏の条件としても、不可能なことを強いることになり、文の構成からも不合理に見えてしかたがない。

布施博士に教えを乞うた頃、影山博士にも私の所見を訴えて見た。影山博士からは、

「御尋ねにより文字配置上全く同感です。

文句会本卷二十七、廿四右の記の文は

『指_二縁・_一具足者』とあり、

「有」は中村元博士監修の新仏教辞典二〇九には // bhava // バヴァの訳、こころをもつ生きものとしての生存を意味すると。木村先生は // gata // との事、いづれ近い内に坂本幸男博士が岩波文庫から、法華経の下巻を出版されま
すから判明することと思います。就いて御覧頂ける筈、今暫くの事でしよう。」

(昭和四十年一月六日)

と丁重な御返書を頂いた。

坂本博士の岩波文庫版は、上巻が昭和三十七年七月十六日、中巻が三十九年三月十六日に発行されたので、下巻は間もなく出版されることと、楽しみに待ったが、四十年にはそのことなく、四十一年もついに出不ず、四十二年も、十二月十六日になって、漸く発行された。博士の用意周到な御研鑽がうかがわれる。早速拜読したところ、

「諸有」に「もろびと」のカナを振られている。明かに「諸有」を諸の有情、即ち布施博士の所謂「衆生」の意を表わす訓みとなっていた。私の十数年来の疑雲が晴れた気がした。それで、私は昭和三十九年来、檀徒の信行用に、「諸有」を「衆生」とよませ、「衆生にして、功徳を修し、柔和質直なる者は」と訓み、別に詩文に和訳して、「されど、功徳を おさめつつ、柔和に、質の直き者は、則ち 我身世にありて、法を説くをば見るならん。」と「諸有」を明示しなくとも十分に原典の意を表わし得ることに自信がついた。

しかしながら、坂本博士と共訳された岩本裕博士の梵語原典からの訳文

「しかし、この人間世界に心おだやかな親切な人々が生れたとき、かれらは生れるやいなや、清らかな業によって教えを説く余を見るのだ。」

に接する時、「生れるやいなや」とあれば、「清らかな業」は生れてから修めた浄業ではなく、前世に於ける「修善」としかうけとれない。

本田義英博士は

「さあれ、善き業積みかさね

人の世ここに生れ来て

ころいともまとな柔和しく

質ただ直ちちしき性ひとびとの衆生しゆじやうは

生まれ来るや、すぐさまに

ここにのり法説ほつとく 我身みはみを

見たてまつりて仰ぐらん。」

と訳されている。

明かに、「前世に功德を修めたること有って柔和質直なる者は」の意が表われている。

南条文雄、泉芳環共訳の「梵漢対照新訳法華経」は

「さはれ順良柔軟の

有情は人間に生じてぞ、

清浄業もて生じたる

かれらは法説くわれを見む。」

としてある。これも、「清浄業もて生じたるかれら」とあって過去の修しゆ、済じが人間界に生れる因であり、同時に仏に見える条件になっている。

岩本訳には「人々」、本田訳には「衆生しゆじやう」そして南条、泉共訳には「有情」と何れも梵本の *saṃviva* の訳名が表わされているがこれを直ちに妙経の「諸有修功德」の「諸有」の訳と見て誤りはないか。しかも「修功德」は今生の

修善でなく、前世の修善であることは以上梵本からの訳書三本に照らして明かになって見れば、妙経の「諸有」は諸の有情ではなくて、「諸」は多数を表わす形容詞で「有」は「有情」という名詞ではなく、「有る」という動詞ではないか。

ここに私のこの疑問にこたえてくれた「訓み」がある。それは、今をさかのぼる七十四年前即ち明治三十二年出版浄土真宗大谷派の織田得能師著作の、「妙法蓮華経講義」そのものである。それには、

「諸有^ル修^ル功德^ニ柔和質直^{ナル}者^ト」

念のために書き下せば

「諸の、功德を修し、柔和質直なること有る者は」

と「諸」を「者」の形容詞にして、「有」を動詞によませているのである。この場合、「者」は *bhava* 或は、*satta* であろう。

「諸」は形容詞ではあるが次の「有修功德、柔和質直」という形容詞句を形容しているからここでは副詞である。つまり

「諸の、『功德を修し柔和質直なる』こと有る者は」ではあるが説誦の時そのところでよんでも聞く人には「諸の功德」と、数多くの功德をおさめなければ仏に見えたとまつることが出来ないという意にとられる。この度、宗務院で発行された「信行必携」も

「諸の—あらゆる—功德を修し、柔和質直なるものは、—」とよませている。

以上各師の訳本より、このところは

「(前世に) 功徳を修めたることありて、(今人間界に生れ来て、) 柔和に質の直き者は」の意、諸は「者」の複数を表わすに止まるから読まなくともさしつかえがない。むしろよむことよって全く異なる意味にとられるから

「功徳を修せしこと有りて、柔和質直なる者は」と訓むべきではないか。

以上私自身梵語を解せず、漢文の文法をわきまえず、しかも「文句」はじめ先師方の訳註を調べることなく、従来
の「訓み」に疑いをもって心のうちで永年堂々巡りをしていたので、記述中、諸先生の労作を疑ったり失礼の点多々あるも齡正に七十になんなんとしていつわが身に変化あるやも知れず、法華経を信じ、説誦せられる方々に、訴えて
叱正を乞うて置きたく、拙い文をものした次第であります。梵語、漢文に通じられる先生方、又教学にたずさわ
っておられる先生方にお願いたしたことは、ここで、昭和新訳の「妙経」を出版して頂くことであります。身延山
か宗務院でその費用を出され、新訳経会議を開き、来る御入滅七百遠忌までに完成させて下さる様切に宗門の責任の
ある方々にお願ひする次第であります。

(四七、七、二〇記)